



『明治40年頃の正門』

京都市動物園開園110周年

～市民とともに110年 みんなの京都市動物園～



『現在の正門』

本年4月を持ちまして開園から110周年を迎えることができました。そこで、年間を通じて入園される皆様に、「都心から近い、お客様と動物が近い、動物が楽しくて、その姿を見て、お客様も楽しい」という「近くて楽しい動物園」を実感していただける取組として「京都市動物園開園110周年記念事業」を実施します。



この4月から平成26年4月まで毎月、110周年記念イベントがあります。例えば4月は、「アフリカの草原」「ひかり・みず・みどりの熱帯動物館」のオープン式典や京都大学連携5周年記念事業を開催します。そして5月には、記念誌を発刊します。などなど・・・

詳しくはホームページを御覧ください。

- * 4月7日～毎週日曜日、先着110名の方に月替わりで記念マグネットを配布します。
- * 5月1日～特典付き年間入園券を販売します。 <http://www5.city.kyoto.jp/zoo/>

アフリカの草原

4月6日(土)
正午オープン!!

～仲間入り～
ミーアキャット
フェネック



ひかり・みず・みどりの

熱帯動物館

4月27日(土)
13時オープン!!

～仲間入り～
カピバラ
ヤドクガエル



ヒトからゴリラへ戻そう！

BR(バトンリレープロジェクト)

バトンリレープロジェクトとは・・・

2011年12月25日から人工哺育となった、赤ちゃんニシゴリラのゲンタロウを両親の元に戻す試み。

人工哺育をしていたゲンタロウは、2012年11月5日に母親のゲンキの元に戻すことができました。また、父親のモモタロウとも12月10日より同居を開始し、こちらもゲンタロウとの距離は、ゲンキの時ほど劇的ではありませんが、徐々に縮まってきています。今回は、人工哺育開始からゲンキに戻すまでの約10ヶ月間に、どのような段階を経て両親の元へ戻ったのかを御紹介します。

第1段階 ゴリラに恐怖心を抱かせないようにしよう！

これまで日本では、人工哺育で育てられたゴリラが再び群れに戻り、ゴリラとして暮らした例はありませんでした。しかし、欧米の動物園では一般的で、人工哺育で育てたほとんどの子どもが、1年以内にゴリラの群れに戻っています。そこで、ゲンタロウの人工哺育が決まると、欧米の資料を入手し、ゲンキの性格や現在の状況、京都市動物園の施設で可能なことなどを検討して計画書を作りました。

ゴリラの赤ちゃんは、生まれて1年ほどは、常に母親にしがみつきのまわっています。そこで用意したのは、しがみつきやすい、黒いフリース生地で作ったポンチョです。このポンチョで哺乳することにより、ゲンタロウに黒い色が「安心できる色」として認識してもらいたかったからです。他にも、ゲンキの臭いが染みついている敷きワラを嗅がせたり、ゴリラの声をまねて哺乳を行ったりと、出来る限りの努力をしました。



第2段階 ゲンタロウを施設の環境に慣らそう！

京都市動物園の類人猿舎は、ゴリラだけが生活しているわけではなく、チンパンジーとオランウータンも暮らしていました。したがって、チンパンジーやオランウータンの声や臭いにも慣れておく必要があります。また、物心がつく前に動物だけではなく、これから生活していく部屋の様子や雰囲気などを知っておくことはとても重要なことです。

ゲンタロウの普段生活している保育器がある部屋と、類人猿舎は別の施設のために、2012年1月31日より短時間の類人猿舎滞在から始めました。始めの頃は、少し緊張している様子が見られましたが、慣れるまでにはそれほど時間はかかりませんでした。そして、間もなく類人猿舎で哺乳を行う時間も設けられるほど、落ち着いて過ごすようになりました。



第3段階：その1 ゲンタロウをゲンキと対面させよう！

ゲンタロウが類人猿舎で普通に過ごせるようになった2012年2月18日、いよいよ両親との対面がスタートしました。いきなり近い距離で始めてしまうと、怖がってしまう可能性もあるので、少し距離を開けて(約2m)始めました。まずはゲンキからです。すぐにゲンタロウを見つけました。じっと見つめていたかと思うと、水を口に含み、ゲンタロウをめがけて2回ほどかけてきました。しかし、5分もたたない間に、「ソフソフ」と落ち着きをなくし、檻につかまって、「その子を私のお腹に乗せて」と言わんばかりに、お腹を見せてきます。また、優しい声で鳴いたり、檻から手を出してきたりと、触りたい一心でいろいろな行動を繰り返しました。数日かけてゲンタロウが、ゲンキに恐怖心を持っていないかを注意深く観察し、檻越しでの親子の接触を開始しました。ゲンキはゲンタロウの手に優しく鳴きながら触れ、愛おしそうに頭や指をなめました。もし、ゲンキが自分の子どもだという認識を持っていたなら、取り戻そうと自分の方へ引っ張り込もうとするはずですが、そういった行動は見られませんでした。おそらく担当者が母親で、その子どもを触らせて欲しいといった行動なのだと思います。ただ、自分も赤ちゃんを抱いていて、その子がいなくなってしまうことを思い出し、このような行動になったのだと思います。ゲンキに十分な母性が残っていることが確認でき、私たちは希望を持ちました。その後、同居の時まで、この行動は継続して見られました。



第3段階：その2 ゲンタロウをモモタロウと対面させよう！

さて、次はモモタロウの番です。当時まだ11歳と若いモモタロウとの対面は少々不安でした。ところがモモタロウは、今まで聞いたことのない優しい声で鳴きかけ、両手の指先でゲンタロウの頭に、そっと触れました。モモタロウは、母親から愛情たっぷりに育てられ、ゴリラの社会性は身に付けていましたが、生まれる前に父親が亡くなっていたので、父親としての振る舞いが上手にできるのか、とても気になっていましたが、まずまずの滑り出しとなりました。ただ、その後は、ゲンタロウに対してゲンキほど、長時間関わろうとはしませんでした。やはりゴリラの1年目の育児については、母親が主導権を持っていることが、再確認できました。



第4段階 ゲンタロウを両親の部屋で遊ばせながらゲンキと対面させよう！

いよいよ、同居までの最終段階に入りました。両親のどちらかの部屋で遊ばせながら、隣の部屋にゲンキを入れ、部屋間での対面です。ゲンタロウがゲンキの存在を気にせず遊び回るまでに少し時間がかかりました。しかし、だんだんと好奇心も旺盛になってきたこともあり、9月の中頃には、ゲンタロウが自らゲンキに歩み寄り、檻越しで接触する場面も見られるようになりました。この行動は、ゲンキに対する恐怖心がなくなり、「顔見知り」のような存在になったことの証です。いよいよ同居の日が近づいてきたようです。

そこで最後に行ったのは、檻越しでの哺乳です。同居が上手くいっても、ゲンキから母乳は出ません。ゲンタロウには、少なくとも後1年は、檻越しにミルクを与える必要があります。この練習は、スムーズに進み、上手にミルクを飲むことができるようになりました。



最終段階 ゲンタロウを両親と同居させよう！



2012年11月5日ついに同居の朝を迎えました。ゲンタロウとゲンキは、これから何が起こるのか分かっていませんが、スタッフ間には、期待と不安で何とも言えない緊張感が漂っていました。10時の開始時間がやって来ました。震える手で2頭の仕切り扉を開放しました。ゲンキは直ぐにゲンタロウのいる部屋へ入って行きました。しかし、ゲンキは1mほどの距離を保ち、ゲンタロウをじっと見つめた後、部屋にばら撒いてある餌を探し始めました。ただ、餌を食べながらも、ずっとゲンタロウのことを意識しているように見えました。餌がなくなるとゲンキは、ゲンタロウに触れ始めました。ゲンタロウは当初、ゲンキに抱きつこうとしていましたが、ゲンキが触れてくるようになると、体を丸めじっと動かなくなりました。それからしばらくすると、ゲンキはゲンタロウの背後へ回り、抱えて持ち運ぶ行動を見せるようになりました。どうやら2頭は、どうして良いのか分からず「途方に暮れていた」ようです。雰囲気良かったので、このまま夜間も一緒に過ごすことになりました。夜はいつも一人で寝ていたゲンタロウは、ワラを敷きつめた床の隅で眠ってしまいました。一方のゲンキは、いつもは高い棚で寝ているのですが、しばらくウロ

ウロした後、眠っているゲンタロウから少し間隔をあけて、横で眠り始めました。翌日からは抱きついて移動したり、一緒に眠ったりと、人工哺育をしていたことがまるで夢だったかのように、2頭の新しい親子関係が深まっていきました。一方のモモタロウとの同居ですが、こちらはゲンキの時のように劇的には進みません。ゲンキは他のお母さんゴリラと同様に、なかなか他の個体には触らせてくれないのです。モモタロウにとっては我慢の時だと思えます。しかし、少しずつですが確実にモモタロウとの距離も縮まってきているので、もう少し経てば一緒に遊ぶ姿を御覧いただけると信じています。



何とか、人工哺育から両親の元へ戻すことが出来ました。最近「寂しくないですか?」とよく質問されます。答えはいつも「NO」です。今の心境としては、「自分の娘が子供を産んで、その後に病気になり、娘に代わって育児をしていた赤ちゃんが、娘の元へ戻っていった。」というのが私の気持ちに一番近いような気がします。だからとても嬉しいのです。ただ、両親の元に戻ったからと言って、バトンリレー・プロジェクトの終了とは言えません。「10年、15年後にゲンタロウが繁殖に関わることができているか?」ということが、このプロジェクトの最終目的であるということを皆さんも知っておいていただき、これからもあたたかく見守っていただければ幸いです。

飼育担当 長尾充徳

タンザニアの野生動物を訪ねて Part 5



2012年8月、京都大学野生動物研究センターの協力で、野生動物を訪ねタンザニア連合共和国へ研修に行ってきたので報告します。

タンザニア研修では、主にゴンベ国立公園とセレンゲティ国立公園を訪ね、多くの野生動物に出会い彼らの生き生きとした姿を観察することができました。ゴンベ国立公園は、チンパンジーの研究で有名なジェーングドール博士が、野生のチンパンジーが道具を使用することや、肉を食べることを初めて発見した場所です。チンパンジー達は人間に見られることに慣れているので、私たちのすぐ目の前で餌を食べたり、子どもやおとながじゃれ合い自然に過ごしていました。

そして個体ごとに名前が付けられ、私が読んでいた本の中に登場した、グレムリンやフロドという名のチンパンジー達と直接出会えた事を嬉しく思いました。また、本が書かれた当時と違うαオス(第一位オス)へと世代交代していたことに、時の流れを感じ親しみも覚えました。

また、彼らがこれからも健やかに暮らしていくためには生息環境の保全が大切です。以前は焼畑農業が問題となっていました。現在は森林再生プロジェクトが進み、農業指導や教育支援などを行うことで地域住民の生活水準も向上し効果が上がっています。この現状を知り、ヒトもチンパンジーも共に豊かになって欲しいと願い、この研修で得た経験を今後の仕事に活かしたいと
(飼育課 釜鳴宏枝)



『グレムリンとその子ども』

できごと

チンパンジーの赤ちゃんが誕生！

生まれました♪

☆2月12日、チンパンジーの「コイコ」がオスの赤ちゃんを出産しました！コイコにとっては4度目の出産ですが、当園でチンパンジーの赤ちゃんが誕生したのは、実に49年ぶりとなります。

ベテランお母さんに守れながら元気に成長して欲しいと、願っています。



『2013年2月19日撮影』

新しい仲間

☆「アフリカの草原」に那須どうぶつ王国からフエネックが1頭、ミーアキャットが2頭やってきました！

☆「ひかり・みず・みどりの熱帯動物館」に那須どうぶつ王国からカピバラが1頭、やって来ました！円山動物園からヤドクガエルがやってきました！

安らかに

★1月4日、ボルネオオランウータンの「ホップ」が多臓器不全のため死亡しました。当園で生まれ、32歳でした。多くの来園者に愛され、ありがとうございました。



寄付のお知らせ

ありがとうございました

京都岡崎白川ライオンズクラブ様からキリンの塔の塗装・説明板とアフリカの草原ゾーン看板を、並木グループ様から桜の木を、国際ソクタ京都IIクラブ様からキリン舎アクリルボードを寄贈していただきました。

定期購読を希望される方は、80円切手4枚(1年分)を同封して京都市動物園までお申し込みください。

氏名又は名称：京都市長 門川 大作
事業所の名称：京都市動物園
事業所の所在地：京都市左京区岡崎法勝寺町126
動物取扱業の種別：展示

登録番号：070051
登録年月日：平成19年5月22日
有効期間の末日：平成29年5月21日
動物取扱責任者氏名：和田 晴太郎

